

ディオスコリデス『薬物誌』の継承と編纂の医学史 ——刊本の書誌学的研究——

坂井 建雄¹⁾, 福島 正幸²⁾

¹⁾ 順天堂大学保健医療学部

²⁾ エディンバラ大学

受付：令和4年9月28日／受理：令和5年1月23日

要旨：ディオスコリデス『薬物誌』の書誌を、世界の有力図書館のオンライン目録とオンラインで入手可能な電子書籍を利用して調査し、根拠に基づいた出版目録を作成した。目録はリドルによるディオスコリデス目録と照合して整合性を確認した。ギリシア語原典は、8種の校訂版が9回出版された。ラテン語訳は7人の訳者らにより52回出版され、41点は注解付であった。さらにラテン語注解30点が別に刊行され、計71の注解は25人の著者（内2人が無名）により書かれた。リュエル訳は最も広く読まれ36版を重ねた。イタリア語訳は18世紀までに23点、21世紀に1点が刊行され、内21点はマッティオーリの訳である。フランス語訳は3人による15点が17世紀までに刊行された。スペイン語訳は11点が、ラグーナと他の3人により訳された。ドイツ語訳は17世紀までに3点、20世紀以降に2点がある。チェコ語訳は16世紀に1点がある。英語訳は20世紀以後に6点が刊行された。日本語訳は20世紀以後に2点がある。『薬物誌』の刊本には二つの目的があると考えられ、一つは古代の原典の人文的研究でラテン語訳が用いられ、もう一つは薬剤使用のための実用書でもに図版付の近代語訳がよく用いられた。

キーワード：ディオスコリデス、薬物誌、ラテン語訳、近代語訳、出版

ディオスコリデス Dioscorides, Pedanius (Διοσκουρίδης, Πεδάνιος) は西暦40-80年頃に活躍した医師で、著書に『薬物誌 De materia medica (Περὶ ὕλης ἰατρικῆς)』全5巻がある。『単純薬論 Simplicia (Περὶ ἀπλῶν φαρμάκων)』全2巻は偽作とされている。『薬物誌』は植物を中心に多数の医薬材料を網羅しており、18世紀に至るまで植物学・薬物学の権威として尊重された。

ディオスコリデス『薬物誌』には重要な先行研究がいくつもある。まず『薬物誌』の著作そのものについては、ギリシア語原典の校訂版とそれに基づいたスペイン語訳、ドイツ語訳、英語訳、日本語訳が刊行されている¹⁾。ディオスコリデスと『薬物誌』に収録される医薬については、リドルによる詳細な研究がある²⁾。古代・中世から近代以前までの植物学についても優れた研究がある³⁾。

『薬物誌』における植物の記述に関してリドルは、概ね①植物の名称、②一般的な生息地、③植物の描写④植物のもつ特質、⑤薬効、⑥副作用、⑦投与量、⑧採取時期と方法、準備、保管方法、⑨粗悪品とその検査法、⑩動物への使用、⑪非医学的な使用、⑫特定の生息地、という順で記述されていると分析する⁴⁾。ただし、よく知られた植物については生息地が省略されたり、また特産地はしばしば植物の名称とも結びつき、各項目の比較的冒頭に置かれることもあるため、リドルも認めているように厳密にこのような区分を適用することは難しい。しかし、全体として名称、植物の描写は多くの場合で冒頭に記述され、さらに薬効とそれと密接に関係する各植物の特質や特定産地は省かれることが少ない。

15世紀以後の『薬物誌』刊本の出版状況につい

て、リドルは簡潔に次のように述べている⁵⁾。ギリシア語原典が15世紀に1回、16世紀に5回出版。ラテン語訳に7種類、アラビア語訳に3種類あり、ラテン語訳が15世紀に1版、16世紀に49版が出版され、ラテン語注解が36種類あり、1478–1600年に96回印刷されている。イタリア語、フランス語、ドイツ語、チェコ語、スペイン語、オランダ語、英語、アラビア語への翻訳が43回印刷されている。これらの版の多くはフォリオ判で、植物と動物の木版画を備えている。これらの情報の元になったのは、リドルによるディオスコリデス書誌の研究である⁶⁾。ここではラテン語の翻訳と注解について、それ以前のさまざまな目録に掲載された『薬物誌』の刊本を、現物ないし図書館の情報に基づいて検証し、書誌情報を確認している。しかし一部には不確実な情報も星印(*)をつけて残されている。また近代語訳については検証が一切なされていない。

今回の調査ではリドルによる書誌研究を踏まえ、ディオスコリデス『薬物誌』の刊本の目録を作成する。その手段として、世界の有力な図書館のオンライン目録、およびウェブから入手可能な電子書籍を利用する。こうして確実な根拠のある『薬物誌』のラテン語版と近代語版の出版目録を作成し、重要な原典版・翻訳・注解について紹介するとともに、刊行状況を明らかにする。

材料と方法

ディオスコリデス『薬物誌』の刊本について、以下の3つのアプローチを使って印刷・出版目録を作成した。

日本および世界の大学などの公的な図書館のうちで、歴史上の医学資料を豊富に所蔵する以下の4図書館のオンライン蔵書目録から、ディオスコリデス『薬物誌』のギリシア語原典、ラテン語訳、近代語訳および注釈書を検索した。

- ・米国国立医学図書館 (NLM: National Library of Medicine, Bethesda, MD, USA)
- ・フランス国立図書館 (BNF: Bibliothèque nationale de France, Paris, France)
- ・バイエルン州立図書館 (BSB: Bayerische Staats-

bibliothek, München, Germany)

- ・大英図書館 (BrL: British Library, London, United Kingdom)

『薬物誌』の電子書籍をインターネットで蒐集し、蔵書目録の書誌情報を確認・補完した。とくに以下の検索サービスをよく利用した。

- ・Internet Archive
- ・Google books
- ・Zentrales Verzeichnis Digitalisierter Drucke (ZVDD)
- ・Gallica

さらに作成した出版目録をリドルのディオスコリデス目録と照合し、整合性を検証した。

結果・考察

1) 『薬物誌』刊本の出版状況

今回の調査により『薬物誌』刊本の15世紀末以降の出版状況が明らかになった。ギリシア語原典は1499年から20世紀初頭までに9点が出版され、そのうち5点がラテン語との対訳であった。ラテン語訳は1478年にイタリアで出版されてから17世紀までに5カ国で51点、19世紀に1点、注解書が17世紀までに30点が確認された。近代語訳としては1542年のイタリア語訳を皮切りに18世紀までの間に5カ国語で51点が出版され、20世紀以後に英語と日本語を含む5カ国語で13点が出版されている。これら刊本の出版目録については別項の資料として掲載し⁷⁾、本論ではその記号番号を参照する。

『薬物誌』印刷本については、これまでさまざまな形の目録が作られてきた。19世紀のドイツの植物学者プリッツェル(1815–1874)の『万国植物文献宝函』(1872)には、ギリシア語とラテン語版が54、スペイン語版が1(+類似版9)、フランス語版が2(+未確認版1)、イタリア語版が6、ドイツ語版が2挙げられている⁸⁾。これに加えて9種類の目録をもとに、南アフリカのオスバルドステンとウッドは『薬物誌』および派生書を含めた目録を作成して266点を挙げているが、出版者などの書

誌情報が記載されておらず、目録内容の信頼性が乏しい⁹⁾。

文献上の『薬物誌』の出版目録の情報について、リドルは実在する書籍や図書館の蔵書目録などを使って検証を行った。その結果『薬物誌』のラテン語版として、①複合書(翻訳と注解を含むもの)15種類(確認済み33版, 未確認5版)、②訳者7人による48版(訳書13版, 複合書35版)、③著者38人による注解87版(複合書ないし訳書48版, 注解書確認済み31版, 未確認8版)を認めている。しかしこれらのラテン語版の書誌は出版目録の形で整理されていない。また近代語訳については検証がなされていない¹⁰⁾。

リドルの書誌研究に掲載されたラテン語版の複合書, 訳書, 注解書には, 確認されたもの, 未確認のもの, 疑問・否定されたものがある。今回の研究で作成した『薬物誌』の刊本目録は, リドルが確認した刊本のすべてを含み, 疑問・否定された刊本は一つも含まず, 未確認の刊本については一部のものを含み, さらにその一部は書誌事項を訂正した¹¹⁾。今回の刊本目録のラテン語版の部分は, リドルの書誌研究の結果と整合的でありかつその内容を拡張している。近代語訳については根拠をもとに編まれた初めての目録になる。

2) ギリシア語原典の刊本

『薬物誌』ギリシア語原典の刊本には9点があり, 校訂本としては8種類がある。

ディオスコリデス『薬物誌』の初のギリシア語

原典校訂版(editio princeps)は, 1499年のマヌーツィオ Manuzio, Aldo (ca. 1450–1515)の手により, ヴェネツィアで出版された(Venice, 1499 [A-1])。マヌーツィオは, バッシアーノに生まれ, ローマのサピエンツィア大学で古典学を習得した。その後, フェラーラでは哲学者で人文主義者のピーコ・デッラ・ミランドラ Pico della Mirandola, Giovanni (1463–1494)と共に古典語を学んだ。1490年頃ヴェネツィアに渡り, 1494年にアルド印刷所を設立し, 積極的にギリシア・ローマの文学作品の収集を開始する。さらに, エラスムスをはじめとする当時の知識人を自宅に招き, 写本の選択やテキストの修正を行った。

マヌーツィオによる版(通称アルドゥス版と呼ばれる)には, 『薬物誌』の他, ニカンドロス(紀元前2世紀)による『テリアカ』および『アレクシパルマカ』と題された有毒生物・毒物・解毒剤を題材にした長短短六歩格の詩も収められている。マヌーツィオは校訂にあたり, 現在ヴェネツィアのマルチャーナ図書館に収められている中世写本 Marcianus Venetus 271 (15世紀)を使用した¹²⁾。

第2の校訂本は, マヌーツィオ死後の1518年に, 娘婿であるダソーラ D'Asola, Gian-Francesco (アスラーノ)とパドヴァ大学医学部教授であったロシヨ Roscio, Geronimoによって作成された(Venice, 1518 [A-2])。以下に, 比較対照のため第1巻第1項(アヤメの項)の冒頭を1499年の初版と1518年の改訂版からそれぞれ引用する。

1499年アルドゥス版	1518年アルドゥス版
<p>Περὶ ἴριδος Ἴρις οἱ δὲ, ἴρις Ἰλλυρικὴ. οἱ δὲ θελίπιδη. οἱ δὲ, οὐρανία. οἱ δὲ, καθαίρων. οἱ δὲ, θαυμαστός. ῥωμαῖοι ῥάδιξ μαρίκα. οἱ δὲ, γαλδίολα. ὀπερ τρίτος. οἱ δὲ κονσακράτριξ. αἰγυπτιοὶ ναρί. ἀπὸ μὲν κατ' οὐρανὸν ἐμφορείας ὀνόμασται. φύλλα δὲ φέρει ὅμοια ξιφίᾳ. μείζονα δὲ καὶ πλατύτερα καὶ λιπαρότερα.</p>	<p>Περὶ ἴριδος Ἴρις Ἰλλυρικὴ φύλλα ὅμοια ξιφίᾳ. μείζονα δὲ καὶ πλατύτερα καὶ λιπαρότερα.</p>

1518年版では、植物の異名を記した現在では偽作と考えられている下線部 (Wellmannの校訂本ではRV [Recentio Vindobonensis: ウィーン校訂本]) がすべて削除されている。また、 $\xi\pi\acute{\alpha}\rho\alpha$ という誤植も正しい形 $\xi\pi\acute{\alpha}\rho\alpha$ に改められている。このように全頁を通じて異名部分が削除されたことで、テキストは大幅に短いものとなった。なお、この版の作成に際しては、現在ヴァチカン図書館に収められている中世写本 Vaticanus Palatinus graecus 77 (14世紀) も校合に加えられた。この写本には、アルファベット索引が付されている。

第3の校訂本は、1529年にハイル Heyl, Johann [Soter] が校訂したもので、これは初のギリシア語・ラテン語の対訳本である (Köln, 1529 [A-3])。ハイルは東洋学を修めた後、ケルン大学で医学を学んだ。ギリシア・ローマの文学作品に高い関心を示し、ディオスコリデスの他、ヒュギーヌスなどの作品も世に送り出した。この版には注解も付されているが、これはアドリアーニのものを使用している。この校訂本では、現在フィレンツェメディチ家図書館所蔵にされている中世写本 Laurentinus 74, 23 が使用された¹³⁾。現存するこの写本は、目次部分の最初の数葉にあたる始まりの部分が欠損している¹⁴⁾。植物の挿絵は一切含まれていない。アドリアーニはラテン語の翻訳の際にもこの写本を用いた。

第4の校訂本は、ハイル版と同じ1529年、ハインポール Haynpol, Johannes (ca. 1500–1558) によってバーゼルで出版された (Basel, 1529 [A-4])。彼はコルナリウス Cornarius, Janus というラテン語名でより知られる人物である。コルナリウスは、靴職人の息子としてドイツのツヴィッカウで生まれた。1518年にライプツィヒ大学で文学の学士号を取得した後、ヴィッテンベルク大学に移り1523年には医師免許を取得する。ロストック大学、マールブルク大学の教授を歴任した後、イエーナ大学の医学部教授を務め、そこで没した。

第5の校訂本は、グピル Goupyl, Jacques (ca. 1525–1564) によるもので、1549年パリで出版された (Paris, 1549, 1549 [A-5, 6])。これはギリシア語とラテン語の対訳本になっている。この対訳本

は同じ年にビルクマン Birckmann, Arnold 未亡人とオルタン Haultin, Pierre という別々の印刷者のもとで2つの版が出版されているが、中身は同じである。グピルは、リュソンに生まれ、ポワティエで文学を学んだ。その後医学の道を志し、1548年パリ大学で博士号を取得した。ディオスコリデス『薬物誌』の他、アレタイオスやピザンツの医師アエギナのパウロス、アクトゥアリオスなど様々な医学文書の校訂・翻訳を行ったことで知られる。この校訂本の最後には、グピルが使用した諸写本の異読、バルバロ、アドリアーニ、リュエルによるラテン語訳の異同がまとめられている。

第6の校訂本は、ハンガリー出身の文献学者・医師ジャンボキ Zsámboky, Janos [Sambucus, Johannes] (1531–1581) が開始し、サラザン Sarrasin, Jean Antoine [Saracenus, Janus] (1547–1598 or 1602) がこれを完成させ、1598年にフランクフルトから出版された (Frankfurt, 1598 [A-7])。ジャンボキは、1531年トルナヴァ (現在のスロヴァキア西部) に生まれた。幼少期から英才教育を施され、11歳でウィーン大学に入学した。1542年にウィーン大学を卒業すると、インゴルシュタットへ移り、修辞学と数学を学んだ。フランス、イタリアと各地で勉学を続けた後、医学へ転向する。パドヴァ大学で医学を専攻し、医師免許を取得する。神聖ローマ皇帝フェルディナンド1世の庇護を受け、その後マクシミリアン2世の侍医を務めた。ジャンボキはその生涯で様々な古典ギリシア・ローマのテキスト校訂を扱ったが、そのうち実現することなく終わったものの一つがディオスコリデスの『薬物誌』である。ジャンボキはギスラン・ド・ブスベック Ghiselin de Busbecq, Ogier (c. 1522–1592) の蔵書であったウィーン写本を含む様々な中世写本の閲覧をし、より完全な『薬物誌』の校訂本を企図していたが、多くの出版社はすでに成功を収めていたマッティオーリ版と競合することを望まず、企画は暗礁に乗り上げていた。しかし、印刷業者かつ古典学者としても著名なエティエンヌ Estienne, Henri [Stephanus, Henricus] に接触し出版を企画、リュエルのラテン語翻訳の改良にも当たれる文献学者としてサラザンを紹介

された。サラザンは、1547年リヨンに生まれ、ジェノヴァで医学を修めた人物で、1573年モンペリエで医学の博士号を得ていた。サラザンがこの仕事の依頼を受けたのは1570年代と推定されているが、完成には20年近く要したため、ジャンボキは出版を見ることなく没した。ジャンボキは、多くの中世写本を所有しており、『薬物誌』の校訂のためには前述の Vaticanus Palatinus graecus 77 の他、Vindebonensis medicus graecus 14 (15世紀)も使用した¹⁵⁾。

第7の校訂本は、1829年シュプレングル Sprengel, Kurt (1766–1833) によってライプツィヒで出版された (Leipzig, 1829 [A-8])。シュプレングルはドイツのボルデコウに生まれ、ハレ大学で神学と医学を学んだ人物である。1798年に同大学の教授に就任し、医史学・植物学の研究に従事した。シュプレングル版は初の近代的な校訂版 (critical edition) で、中世諸写本を校合し、より完全な形での『薬物誌』の原典テキストを再現しようとしたものである。シュプレングルが校合に用いた主な写本は、ウィーン写本 [Vindobonensis med. gr. 1]¹⁶⁾、ジャンボキ、サラザンが使用したナポリ写本 [Neapolitanus = Vindobonensis suppl. gr. 28]、ヴァティカン写本 [Vaticanus Palatinus gr. 77] である。この他、グピルにより引用されたパリ諸写本の異読にも触れているが、その写本の詳細については不明である。

第8の校訂本は、1906年ヴェルマン Wellmann, Max (1863–1933) によってベルリンで出版された (Berlin, 1906 [A-9])。ヴェルマンは、1863年ポーランドのシュチェチンに生まれた。グライフスヴァルト大学で古典学を修め、とりわけ古代医学の原典校訂に従事した。多くの卓越した業績を残すも、大学教授の正規職に就くことができず、生涯は不遇であった。ディオスコリデス『薬物誌』は彼の最大の功績であり、現在もこの版が研究者の標準版として用いられている。アルドゥス版 (Venice, 1499 [A-1]) を底本としたリュエルの初期ラテン語訳 (Paris, 1516 [B-4]) と比べて、ヴェルマンの校訂本では6項目 (第2巻55章, 第3巻41, 74章, 第4巻85, 133, 141章) が加えられてい

るが、その違いはわずかであり、医薬材料に関しては原型がほぼ保たれている。

しかし、近年リドルの研究により、ウィーン写本、ナポリ写本、アトス写本とは別系統の、より完全な形の諸写本の存在が指摘されており、実際にはヴェルマンが想定していたよりも遥かに複雑な写本伝承を経ていることが明らかになっている。写本の数にも大幅な見直しが必要で、ヴェルマンが閲覧した写本は30ほどであるが、トゥエドゥはその6倍から7倍の数の写本を報告している¹⁷⁾。なお、ディオスコリデスの最新の写本伝承に関してはクロニエの優れた研究がある¹⁸⁾。

3) ラテン語訳とその注解

ディオスコリデス『薬物誌』のラテン語訳は52点あり、7人の訳者が49点に関わり、3点は訳者不明である。

- ・無名訳者：この翻訳の最古の形は6世紀以前に遡るとされる。12世紀頃にサレルノ地域において、新たにいくつかの素材を付け加えてアルファベット順に編集され、アバノのピエトロ Pietro d'Abano [Petrus Padubanensis] (c. 1250–c. 1316) による序文がつけられた。イタリア (Colle di Val d'Elsa, 1478 [B-1]) とフランス (Lyon, 1512 [B-2]) で刊行されている。
- ・リュエル Ruel, Jean [Ruellius, Johannes] (1474–1537, フランス) によるラテン語訳は最も数多く出版され、フランスで17点 (Paris, 1516, 1537, 1549, 1549 [B-4, 13, 24, 25]; Strasbourg, 1529 [B-11]; Lyon, 1543, 1546, 1547, 1547, 1550, 1552, 1554, 1554, 1554, 1554, 1555, 1563 [B-18, 21, 22, 23, 27, 29, 30, 31, 32, 33, 35, 43]), イタリアで12点 (Bologna, 1526 [B-8]; Venice, 1527, 1538, 1550, 1554, 1558, 1559, 1560, 1565, 1569, 1570, 1583 [B-9, 14, 28, 34, 37, 41, 42, 44, 45, 46, 47]), スイスで3点 (Basel, 1539, 1542, 1674 [B-16, 17, 51]), ドイツで3点 (Frankfurt aM, 1543, 1549, 1598 [B-19, 26, 50]), スペインで1点 (1518 [B-6]), 合計36点が刊行されている。
- ・バルバロ Barbaro, Ermolao [Barbarus, Hermolaus] (1454–1493, イタリア) による訳はイタリアで

の1点 (Venice, 1516 [B-3]) のみである。

- ・アドリアーニ Adriani, Marcello Virgilio [Vergilius, Marcellus] (1464-1521, イタリア) による訳はイタリアでの3点 (Firenze, 1518, 1523 [B-5, 7]; Venice, 1538 [B-15]), ドイツでの2点 (Köln, 1529 [B-10]; Marburg, 1543 [B-20]), スイスでの1点 (Basel, 1532 [B-12]) の計6点がある。
- ・コルナリウス Cornarius, Janus (c. 1500-1558, ドイツ) による訳はスイスでの1点 (Basel, 1557 [B-36]) のみである。
- ・サラザンによる訳はドイツでの2点 (Frankfurt aM, 1598, 1598 [B48, 49]) がある。
- ・シュプレングルによるものはギリシア語原典との対訳で、ドイツでの1点 (Leipzig, 1829-30 [B-52]) がある。

ラテン語訳52点のうち41点には、本文のラテン語訳に加えて、注解がつけられている。また本文の翻訳を伴わない注解書が30点刊行されている。これらの71の注解のうち、65注解を23人の著者が、6注解を2無名者が執筆している。

- ・アバノのピエトロによる注解は、2点のラテン語訳 (Colle di Val d'Elsa, 1478 [B-1]; Lyon, 1512 [B-2]) に収録されている。
- ・バルバロによる注解は、2点のラテン語訳 (Venice, 1516 [B-3]; Strasbourg, 1529 [B-11]) に収録され、1点の注解書 (Köln, 1530 [C-1]) として刊行されている。
- ・アドリアーニによる注解は、3点のラテン語訳 (Firenze, 1518, 1523 [B-5, 7]; Köln, 1529 [B10]) に収録されている。
- ・マナルディ Manardi, Giovanni [Manardo, Giovanni; Manardus, Johannes] (1462-1536, イタリア) による注解は、9点の注解書 (Lyon, 1532, 1549, 1556 [C-2, 13, 20]; Basel, 1535, 1540, 1549 [C-5, 8, 14]; Venice, 1542, 1557 [C-9, 22]; Hannover, 1611 [C-30]) として刊行されている。
- ・ペトルス Petrus, Cornelius (fl. 1533-40, ネーデルランド) による注解は、1点の注解書 (Antwerp, 1533 [C-3]) として刊行されている。
- ・テクストール Textor, Benoît [Textor, Benedictus]

(active 16th century, フランス) による注解は、1点のラテン語訳 (Venice, 1538 [B-14]) に収録され、3点の注解書 (Paris, 1534 [C-4]; Venice, 1538 [C-7]; Strasbourg, 1552 [C-16]) に収録されている。

- ・ルシターノ Lusitano, Amato [Lusitanus, Amatus] (1511-1568, ポルトガル) による注解は、3点のラテン語訳 (Lyon, 1558, 1558, 1558 [B-38, 39, 40]) に収録され、4点の注解書 (Antwerp, 1536 [C-6]; Venice, 1553, 1557 [C-17, 21]; Strasbourg, 1554 [C-18]) として刊行されている。
- ・コロン Corron, Denis [Corronius, Dionysius] (14.-1551?, フランス) による注解は、3点のラテン語訳 (Paris, 1537 [B-13]; Basel, 1539, 1542 [B-16, 17]) に収録されている。
- ・ゲスナー Gessner, Conrad [Gesnerus, Conradus] (1516-1565, スイス) による注解は、2点の注解書 (Zurich, 1542, 1577 [C-10, 27]) として刊行されている。
- ・ロニツァー Lonitzer, Johann [Lonicerus, Johannes] (1499-1569, ドイツ) による注解は、1点のラテン語訳 (Marburg, 1543 [B-20]) に収録されている。
- ・リュフ Ryff, Walther Hermann [Rivius, Gualtherus Hermenius] (c1500-1562, ドイツ) による注解は、1点のラテン語訳 (Frankfurt aM, 1543 [B-19]) に収録されている。
- ・ブルンフェルス Brunfels, Otto (1488-1534, ドイツ) には、1点の注解書 (Strasbourg, 1543 [C-11]) がある。
- ・フックス Fuchs, Leonhart [Fuchsius, Leonhartus] (1501-1566, ドイツ) による注解は、1点の注解書 (Basel, 1544 [C-12]) として刊行されている。
- ・グピルによる注解は、2点のラテン語訳 (Paris, 1549, 1549 [B-24, 25]) に収録されている。
- ・コルドゥス Cordus, Valerius (1515-1544, ドイツ) による注解は、1点のラテン語訳 (Frankfurt aM, 1549 [B-26]) に収録され、2点の注解書 (Paris, 1551 [C-15]; Strasbourg, 1561 [C-23]) として刊行されている。
- ・ブリュエラン Bruyerin, Jean Baptiste [Joannes

Bruyerinus] (fl. 1530–1560, イタリア) による注解は、2点のラテン語訳 (Lyon, 1550, 1552 [B-27, 29]) に収録されている。

- マッティオーリ Mattioli, Pietro Andrea (1501–1577) による注解は、もともとはイタリア語訳の『薬物誌』(1544) のために書かれ、それをもとにラテン語で書かれたものである。11点のラテン語訳 (Venice, 1554, 1558, 1559, 1560, 1565, 1569, 1570, 1583 [B-34, 37, 41, 42, 44, 45, 46, 47]; Lyon 1563 [B-43]; Frankfurt aM, 1598 [B-50]; Basel, 1674 [B-51]) に収録され、1点の注解書 (Venice, 1571 [C-26]) として刊行されている。
- ラグーナ Laguna, Andres [Laguna, Andrés de; Lacuna Andreas] (1499–1560, スペイン) による注解は1点の注解書 (Lyon, 1554 [C-19]) として刊行されている。
- コルナリウスによる注解は、1点のラテン語訳 (Basel, 1557 [B-36]) に収録されている。
- デュ・ピネ Du Pinet, Antoine [Pinaeus, Antonius] (1510?–1584?, フランス) による注解は、2点の注解書 (Lyon, 1561, 1567 [C-24, 25]) として刊行されている。
- モレルス Mollerus, Justus (fl. 1579, ドイツ) による注解は、1点の注解書 (Basel, 1579 [C-28]) として刊行されている。
- サラザンによる注解は、2点のラテン語訳 (Frankfurt aM, 1598, 1598 [B48, 49]) に収録されている。
- ファロッピオ Falloppio, Gabriele (1523–1562, イタリア) による注解は、没後の全集 (Frankfurt aM, 1600 [C-29]) に収録されている。

〔リュエルによるラテン語訳〕

リュエルは1474年にフランス北部のソワソン

に生まれた。若い頃からギリシア語とラテン語に堪能で、パリに出て医学を学び1508年(あるいは1502年)に学位を得た。翌1509年にフランソワ1世の侍医になったが、著作に没頭するあまり、宮廷の度重なる旅行に随行することを拒んだという。結婚して子をもうけたが、妻が亡くなると、パリ司教のポンシェー Poncher, Étienne に仕え、その庇護の下で研究と著作に専念した。1537年9月24日に脳卒中で亡くなり、ノートルダム寺院に埋葬されている¹⁹⁾。

業績としては、ディオスコリデス『薬物誌』のラテン語訳 (Paris, 1516 [B-4]) は36点以上が出版され、その他にケルスス、スクリボニウス・ラルグス、ビザンツの医師アクトゥアリオスの医学文書の翻訳、『家畜医学 Veterinariae medicinae libri II』の編訳 (1530) を著し、『薬草の性状 De natura stirpium libri tres』(1536) ではテオフラストス『植物誌』などを元にそれぞれの植物をアルファベット順に様々な要素(茎, 葉, 樹皮, 花, 発芽, 接ぎ木, 野菜, 穀物, 薬効)をとりあげて紹介している。

リュエルによる初のラテン語訳は、1499年のアルドゥス版ギリシア語原典を底本として1516年に出版された。底本には、現在偽作と考えられている植物の異名を記した部分(略語で示される)が大量に含まれていたため、ラテン語訳もそれを反映したものとなっている。またこの版には、現在ではディオスコリデスの偽作とされる『毒物について De venenis』が『薬物誌』の第6–9巻として含まれている。また目次には、アルファベット順で収録された医薬材料の名称が記されている。比較対照のため、以下に1499年アルドゥス版の原典テキストと1516年の初版のラテン語訳を引用する。

1499年アルドゥス版	1516年リュエル・ラテン語訳初版
<p>Περὶ ἱρίδος Ἴρις οἱ δὲ, ἱρίς Ἰλλυρική. οἱ δὲ θελπιδή. οἱ δὲ, οὐράνια. οἱ δὲ, καθαίρων. οἱ δὲ, θαυμαστός. ῥωμαῖοι ῥάδιξ μαρίκα. οἱ δὲ, γαλδίολα. ὀπερτρίτος. οἱ δὲ κονσακράτριξ. αἰγυπτιοὶ ναρί. [...] φακοὺς τε καὶ ἐφήλεις ἀποκαθαίρουσι, σὺν ἔλλαβόρω λευκῶ καὶ διπλασίονι καὶ μέλιτι καταπλασθεῖσαι. μείγνυνται δὲ καὶ πεσσοῖς καὶ μαλάγμασι καὶ ἀκόποις. καὶ καθόλου εἰσὶ πολύχρηστοι.</p>	<p>De Iri Iris ab aliquibus illyca, ab alijs thelpide, ab alijs urania, a nonnullis catharon aut thaumastos, a romanis marica radix, a quebusdam gladiola, ab alijs consecratrix, ab aegyptijs nar appellatur. [...] lentiginis et vitia cutis in facie emaculant. pessis malagmatis, et acopis inseruntur. In universum magni ad omnia usus.</p>

リュエルによる翻訳は、ギリシア語をラテン語に逐語訳したものであり、大部分は正確に移し替えられているが、原語の脱落、原文にはない形容詞の追加・順序の入れ替えなど、不正確な箇所も存在する。例えば上記対照表では、ギリシア語原典にあったアヤメ (ἱρίς/iris) の別名オペルトリス ὀπερτρίτοςが翻訳では省略されている。しかしながら、原語の意味が不明確な場合には、説明的な翻訳をするという工夫もされている。例えば、上記アヤメの項目ではギリシア語でエペーリス ἔφηλις と呼ばれる病気について「顔の皮膚のしみ vitia cutis in facie」と説明的な翻訳をしている。

リュエルによるラテン語訳は、16世紀ヨーロッパにおけるディオスコリデス翻訳で最も版を重ねたものであるが、編者によってしばしば修正を受けている。このうち重要な改訂は、(a) コロン Corron, Denis およびリュエル自身による改訂 (Paris, 1537 [B-13]), (b) グビルによる改訂 (Paris, 1549 [B-24, 25]), (c) マッティオーリによる改訂 (Venice, 1554 [B-34]) である。

(a) の改訂では、翻訳底本が1499年のアルドゥス版から1518年のアルドゥス版へ変更されたことで、ラテン語訳は大きく修正され、植物の異名にかかる部分は削除されている。また、コロンによる同版の献辞には、それまでに出版されたディオスコリデスの翻訳がどのような評価を受けたのかについて記述があり、とりわけアドリアーニの翻訳に対してマナルディによる厳しい批判があったことが記されている。リュエルによる翻訳改訂も同様の批判を受けてなされたものであるとされ

る。また、この改訂版にはラテン語の異読が付されているのも特徴である。

(b) のグビルによる最も大きな変更は、ラテン語訳に1518年のアルドゥス版に改良を加えたギリシア語原文を対置させたことである。グビルによる対訳本は1549年にパリで2つの版が出版されているが、中身はまったく同じものである。医薬材料を記した目次は大幅に修正され、見出し語にはギリシア語をラテン語に翻字したものが多く用いられるようになった。リドルはこの版で全面的な修正が行われたと分析する²⁰⁾。確かに、新しいギリシア語に合わせてラテン語の訳も修正されてはいるが、大部分は1537年のコロン+リュエルによる改訂翻訳をそのまま用いており、修正されたギリシア語原典と対応しない箇所が多数認められる²¹⁾。

(c) のマッティオーリによる改訂の多くの版では、表題頁にリュエルの名が記されていない。しかし、マッティオーリ自身が献辞の中で認めているように、ラテン語の翻訳は1537年のコロン+リュエル版 (B-13) を使用している。ただし、一部の項目には、(b) でも確認できない独自の修正も加えられている。医薬材料の目次に続いて、疾患部位に応じて分類されたそれぞれの病気に対してどのような医薬材料を用いるべきか簡潔にまとめられており、実用的な側面が取り入れられているのもこの版の特徴である。この版の最大の功績は、マッティオーリによる膨大な本文注解である(後述)。

リュエル版はその後の多くの注解者・翻訳者の

指針となり、マッティオーリ、ラグーナもリュエル版を多く受容している。同版は16世紀だけでも30以上の版が出版されているが、1598年のサラザン版が出版されたことで、17世紀以後は放棄されている。

4) 近代語訳

4a) イタリア語訳

ディオスコリデス『薬物誌』のイタリア語訳は18世紀までに23点、21世紀に1点が出版されている。そのうち21点はマッティオーリによる翻訳である。

- ・ファウスト Fausto, Sebastiano (1502–1565, イタリア)によるイタリア語訳は1点 (Venice, 1542 [D-1])のみである。
- ・モンティジャーノ Montigiano, Marcantonio (fl. 1547, イタリア)によるイタリア語訳は1点 (Firenze, 1547 [D-3])のみである。
- ・マッティオーリによるイタリア語訳は、翻訳のみの1点 (Venice, 1544 [D-2])と、注解付の20点 (Venice, 1548, 1550, 1551, 1552, 1555, 1557, 1559, 1563, 1568, 1573, 1581, 1585, 1597, 1604, 1621, 1645, 1712, 1744 [D-4, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 18, 19, 20, 21, 22, 23]; Mantova, 1549 [D-5]; Bergamo, 1591 [D-17])が出版されている。
- ・メンギーニ Menghini, Alessandro (イタリア)によるイタリア語訳が、2013年に出版されている (Sansepolcro, 2013 [D-24])。

[マッティオーリによるイタリア語訳と注解]

マッティオーリは1500年にイタリアのシエーナに医師の息子として生まれた。両親がヴェネツィアに移ったためにパドヴァで教育を受け、パドヴァ大学の哲学と医学を1523年に卒業した。父の死後にシエーナへ、さらにペルージアとローマを経てトレント近郊に移り、ここで結婚をして研究と著述に励んだ。1539年にゴリツィアの市医になった。1544年にディオスコリデス『薬物誌』のイタリア語訳 (Venice, 1544 [D-2])を出版したが、これはあまり成功しなかった。1548年に注解をつ

けたイタリア語訳 (Venice, 1548 [D-4])を刊行し、これが広く受け入れられて次々と版を重ねた。マッティオーリはこれをもとにラテン語の注解を書き、リュエルのラテン語訳につけて1554年に刊行 (Venice, 1554 [B-34])し、こちらも繰り返し版を重ねた。マッティオーリの注解付のラテン語版は、1561年にフランス語に訳されて (Lyon, 1561 [E-3])版を重ねた。その後も実用性を高める改訂がなされており、1550年イタリア語版 (Venice, 1550 [D-6])ではアルファベット順の薬草索引の後に疾病毎 (頭から踵へ)に有用な医薬材料をまとめた付録が加えられている。1565年ラテン語版 (Venice, 1565 [B-44])ではこの付録にマッティオーリが選んだ新たな医薬材料が加えられ、さらに巻末に蒸留法の説明と蒸留器の挿絵・解説が収録されている。マッティオーリは1554年にプラハに呼ばれて神聖ローマ皇帝フェルディナント1世の侍医、後にマクシミリアン2世の侍医を務め、この時期にチェコ語訳 (Prague, 1562 [H-1])が出た。1570年にプラハを離れてトレントに戻り、ここで1577年に疫病のために死去した。マッティオーリは、ディオスコリデス『薬物誌』の他、プトレマイオスの『地理学』の翻訳 (1548)も行い、『梅毒に関する書 Liber de Morbo Gallico』(1535)、『梅毒の治療法 De morbi Gallici Curandi』(1536)を執筆している²²⁾。

マッティオーリによる翻訳注解は1544年にイタリア語で初めて出版された。しかし、この版には動植物の挿絵が付されていなかった。1549年に木版画の挿絵入りのイタリア語版 (Mantova, 1549 [D-5])を出版し、これをもとに1554年にラテン語版 (Venice, 1554 [B-34])も出版したところ、この版が成功を収め、多くの版が重ねられることになる。また注解も大幅に修正され、1544年版のおよそ2倍の分量となった。イタリアではすでにバルバロ、アドリアーニ、マナルディらによる『薬物誌』の注解が出版されていたが、これらはいずれも、他の医学作家の相互記述を根拠とした文献学的な性格が強いものであった。

マッティオーリの注解でも、プリニウス、ソラノス、ガレノス、さらにビザンツの医師アマダの

アエティオスなど他の作家による相互参照記述も多数引用されているが、記述の大部分は植物の同定に割かれ、そのために旅行ならびに同僚医師や大使を通じて各地から植物を渉猟していたことが記されている。とりわけ薬草学者で神聖ローマ帝国の大使でもあったギスラン・ド・ブスベックは彼に多数の球根・植物の木版画を提供している。正確な植物の同定とその効能の重要性について、彼は序文の中で長く論述し、多くの医師がさまざまな医薬材料を調合した複合医薬を正しく理解していないこと、さらに複合医薬の理解のためには、なによりもまず単一医薬、すなわちそれぞれの動植物・鉱物等の医薬材料が単体で有する効能を正確に把握することが必要不可欠であると強調している。特にこの点でディオスコリデス以上に称賛されているのは、ガレノスである。

このラテン語版 (Venice, 1554 [B-34]) の最大の功績は、取められた500点以上の動植物の木版画である。ただし、マッティオーリ自身は植物の情報を書物で得ることよりも、現物を実見することの重要性を幾度となく唱えている。序文によれば、この挿絵はイタリア出身の画家リベラーレ Liberale, Giorgio がドイツ人マイヤーベック Meierpeck, Wolfgang の協力を得て作成したとある。リベラーレは当時ゴリツィアやプラハで活躍した動物画家であるが、マイヤーベックに関しては美術史上の文献にもほとんど現れず、詳細は不明である。マッティオーリは、彼以前の注解者ブルンフェルス、フックスらに厳しい批判を加えているにも関わらず、挿絵に関してはブルンフェルスの『薬草写生図譜 *Herbarum vivae eicones*』(1530) とフックスの『草木誌著明注解 *De historia stirpium commentarij insignes*』(1542) の影響を強く受けて、後年の版になるほど植物の木版画が改良されて精細かつ洗練されて大きなものに差し替えられ、その数も増している (図1)。

4b) フランス語訳

ディオスコリデス『薬物誌』のフランス語訳は17世紀までに15点が出版されている。3人の訳者により翻訳されている。

- ・マテー Mathée, Martin (active 1544–1580, フランス) によるフランス語訳は3点 (Lyon, 1553, 1559, 1580 [E-1, 2, 8]) があり、注釈なしである。
- ・デュ・ピネによるフランス語訳は10点 (Lyon, 1561, 1566, 1572, 1605, 1619, 1620, 1627, 1642, 1655, 1680 [E-3, 4, 5, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15]) あり、いずれもマッティオーリの注解付である。
- ・ムーラン Moulins, Jean (1530–1622, フランス) によるフランス語訳は2点 (Lyon, 1572, 1579 [E-6, 7]) あり、マッティオーリの注解付である。

4c) スペイン語訳

ディオスコリデス『薬物誌』のスペイン語訳は17世紀までに9点が出版され、20世紀末以後に2点が出版されている。17世紀までの訳書のほとんどはラグーナが訳している。

- ・ファラヴァ Jarava, Juan de (active 1540–1550, スペイン) によるスペイン語訳は1点 (Antwerp, 1557 [F-2]) のみである。
- ・ラグーナによるスペイン語訳は、いずれもラグーナによる注解付で8点 (Antwerp, 1555 [F-1]; Salamanca, 1563, 1566, 1570 [F-3, 4, 5]; Valencia, 1636, 1651, 1677, 1695 [F-6, 7, 8, 9]) がある。
- ・ヴァルデス Valdés, Manuela García によるスペイン語訳は1点 (Madrid, 1998 [F-10]) がある。
- ・ロペス・エイレ López Eire, Antonio とコルテス・ガボダン Cortés Gabaudán, F によるスペイン語訳は1点 (Salamanca, 2006 [F-11]) がある。

[ラグーナによるスペイン語訳と注解]

ラグーナは1499年にスペインのセゴヴィアで医師の息子として生まれた。ギリシア語とラテン語を学び、1520–21年にサラマンカ大学で、1530/31年からパリで学芸と医学を学び、解剖学の教師にはシルヴィウスとギェンター、外科学にはタゴー、ギリシア語と薬剤学にはリュエルがいた。1534年にソルボンヌ大学で医学の修士を得て、1536年にスペインに戻ってアルカラ大学で教え、1540–45年にはフランスのメッツで医療に従

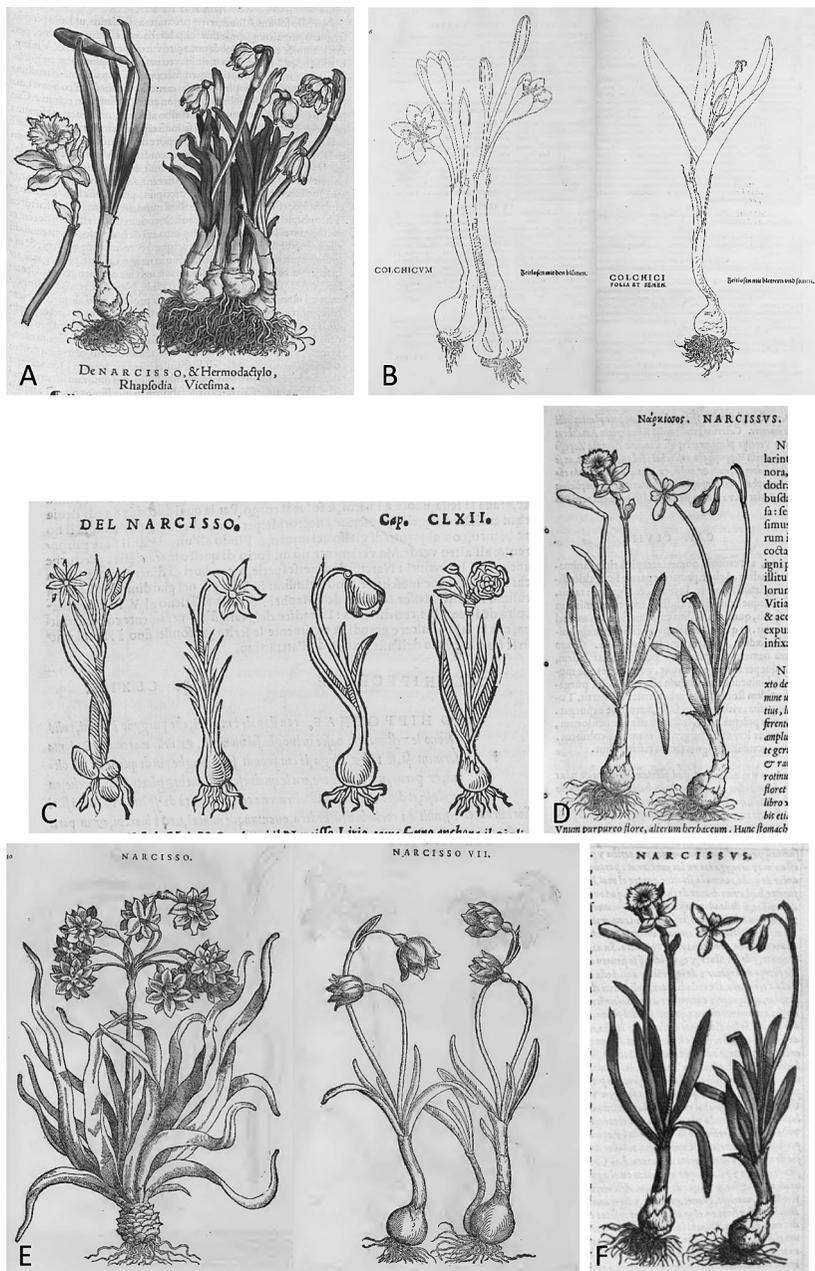


図1 スイセン *Narcissus* の植物画。(A) ブルンフェルス『薬草写生図譜』(1530), (B) フックス『草木誌著明注解』(1542), (C) ディオスコリデス, マッティオーリ訳『薬物誌』イタリア語訳 (1549), (D) マッティオーリ訳『薬物誌』ラテン語訳 (1554), (E) マッティオーリ訳『薬物誌』イタリア語訳 (1568), (F) ラグーナ訳『薬物誌』スペイン語訳 (1555)。ブルンフェルスとフックスの植物画 (A: 1530, B: 1542) は大型で精細である。マッティオーリの植物画は遅れて登場して、当初 (C: 1549) は簡略で図式的であったが、6年後 (D: 1555) には精細で写実的になり、19年後 (E: 1568) には8葉の大型の図版が用いられている (2葉のみ掲載)。ラグーナのスペイン語訳 (F: 1555) では、マッティオーリの1554年の図版と同じものを用いている。

(A) バイエルン州立図書館蔵。 <https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb11199191?page=1>

(B) スミソニアン図書館蔵。 <https://archive.org/details/Dehistoriastirp00Fuch>

(C) フランス国立図書館蔵。 <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k859465h?rk=21459;2>

(D) バイエルン州立図書館蔵。 <https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb10139457?page=1>

(E) ゲッティ研究所蔵。 https://archive.org/details/gri_33125014246561

(F) スペイン国立図書館蔵。 <http://bdh-rd.bne.es/viewer.vm?id=0000037225&page=1>

事し、1550年に教皇ユリウス3世の侍医になった。1557年スペインに帰国した後、今度はオランダに移り、神聖ローマ帝国カール5世、フェリペ2世の侍医を務める。アランフェス植物園の造園にも携わり、1559年頃スペインのグアダラハラで没したとされる²³⁾。

スペインにおける『薬物誌』の受容は、1518年に人文学者アントニオ・デ・ネブリハ Antonio de Nebrija (1444–1522) がアルカラでリュエルのラテン語訳 (Alcalá de Henares, 1518 [B-6]) を出版したことに始まる。この版の最後にはギリシア語の植物名の索引があり、それに対応するラテン語およびスペイン語が追加されており、ラグーナもこれを利用したと考えられている。1554年、マッティオーリが初のラテン語訳『薬物誌』を出版したのと同じ年、ラグーナは『ディオスコリデス注解』(Lyon, 1554 [C-19]) をリヨンで出版し、翌1555年、初のスペイン語による『薬物誌』の翻訳注解 (Antwerp, 1555 [F-1]) をアントウェルペンで出版した。

ラグーナによる注解は、①翻訳、②植物の各国語名(多くはギリシア語、ラテン語、アラビア語、近代各国語という順序)、③注解という順に記されている。①原典の翻訳は、マッティオーリのイタリア語訳(1544)に大きく依存しているが、一部にギリシア語原文の写本異読が付されている点で新しい。②植物の各国語名は、マッティオーリのラテン語初版(Venice, 1554 [B-34])で注解の最後に付されていたものであるが、ラグーナは順序を入れ替え、注解の前に配置換えを行った。③注解に関しては、主にマッティオーリ版に依存しているが、新しく追加された情報も多い。例えば、第1巻3項メオンでは、その生息地としてローマ、ポーロニャが挙げられているが、これはマッティオーリの版にない情報である。記述の大部分は植物学的・医学的使用に関するものである。他方、文献学的な情報に関しては、プリニウスやガレノスなど古代の医学作家の相互参照記述は必要最小限に抑えられ、典拠先の作品名に言及されることもない。また、アミダのアエティオス、アイギナのパウロスが典拠に挙げられることもあるが、ビ

ザンツの医師に言及されることは総じて少なく、学識の誇示は控えめである。そのため、注解全体の長さもマッティオーリと比べ遥かに短い。なお、植物の挿絵の大部分は、マッティオーリのラテン語初版(1554)と酷似したものが用いられている(図1)。

4d) ドイツ語訳

ディオスコリデス『薬物誌』のドイツ語訳は17世紀までに3点が出版され、その後には20世紀初頭に1点、21世紀初頭に1点が出版されている。

- ・ダンツ Dantz, Johann [Dantzius, Joannes] (?–1546, ドイツ)によるドイツ語訳は3点(Frankfurt aM, 1546, 1610, 1614 [G-1, 2, 3])がある。
- ・ベレンデス Berendes, Julius (1837–1914, ドイツ)によるドイツ語訳は1点(Stuttgart, 1902 [G-4])がある。シュプレングル校訂のギリシア語原典(Leipzig, 1829–30 [A-8])からの翻訳である。
- ・アウフメッサー Aufmesser, Maxによるドイツ語訳は1点(Hildesheim, 2002 [G-5])がある。ヴェルマン校訂によるギリシア語原典版(Berlin, 1906–14 [A-9])からの翻訳である。

4e) チェコ語訳

ディオスコリデス『薬物誌』のチェコ語訳は、16世紀に1点が出版されている。

- ・ハーエック Hajek, Tadeáš (1525–1600, チェコ)によるチェコ語訳は1点(Prague, 1562 [H-1])がある。マッティオーリによる注解付のラテン語版から訳されたものである。

4f) 英語訳

ディオスコリデス『薬物誌』の英語訳は、20世紀以後に6点が出版されている。

- ・グッドイヤー Goodyer, John (1592–1664) とガンサー Gunther, Robert (1869–1940)による英語訳が1点(Oxford, 1934 [I-1])ある。グッドイヤーの訳稿(1655)をガンサーが編集したものである。
- ・オスバルデステン Osbaldeston, Tess Anne と

ウッド Wood, Robert Pによる英語訳が1点 (Johannesburg, 2000 [I-2]) がある。グッドイヤーとガンサーの英訳本 (1934 [I-1]) を基本としたものである。

- ベック Beck, Lily Y.による英語訳が4点 (Hildesheim, 2005, 2011, 2017, 2020 [I-3, 4, 5, 6]) がある。ヴェルマン校訂によるギリシア語原典版 (Berlin, 1906-14 [A-9]) からの翻訳である。

4g) 日本語訳

ディオスコリデス『薬物誌』の日本語訳は、20世紀以後に2点が出版されている。

- 鷺谷いづみによる日本語訳が1点 (東京, 1983 [J-1]) がある。グッドイヤーとガンサーの英訳本 (1934 [I-1]) からの重訳である。
- 岸本良彦による日本語訳が1点 (東京, 2022 [J-2]) がある。ヴェルマン校訂によるギリシア語原典版 (Berlin, 1906-14 [A-9]) からの翻訳である。

5) ラテン語訳・注解書と近代語訳の刊行状況

5a) 言語と出版地

18世紀までに刊行されたラテン語訳51点、ラテン語版注釈書30点の出版地は、イタリアが23点 (訳17, 注解6), フランスが28点 (訳20, 注解8), ドイツが15点 (訳8, 注解7), スイスが12

点 (訳5, 注解7), ネーデルランドが2点 (注解2), スペインが1点 (訳1) であった。イギリスからのラテン語訳・注解の出版はなかった。

出版地別の発行年次を見ると、イタリアとフランスでは (1470年代のイタリアでの1点を除いて) 1510年代からよく刊行されるようになり、イタリアでは1580年代まで、フランスでは1560年代までラテン語訳・注解が刊行されていた。ドイツとスイスでの刊行はやや遅れて1520年代末から始まり、ドイツでは1590年代まで、スイスでは1570年代末まで (1点のみ1670年代) 続いた (図2)。

18世紀までに刊行された近代語訳は、イタリア語訳が23点、フランス語訳15点、スペイン語訳9点、ドイツ語訳3点、チェコ語訳1点で、合計51点であった。その大半は17世紀以前であったが、イタリア語訳の2点は18世紀に刊行された。言語と出版地はほぼ一致しているが、スペイン語訳の最初期の2点 (1555, 1557) のみがネーデルランドで出版されていた。ディオスコリデスが植物を調査して『薬物誌』に記した地中海に面する地域を含む、イタリアとフランスとスペインの近代語訳はかなり多いが、アルプス以北のドイツとチェコではごく少数である。ネーデルランドとイギリスの近代語訳は出版されていない。

言語別の発行年次を見ると、ラテン語訳の出版

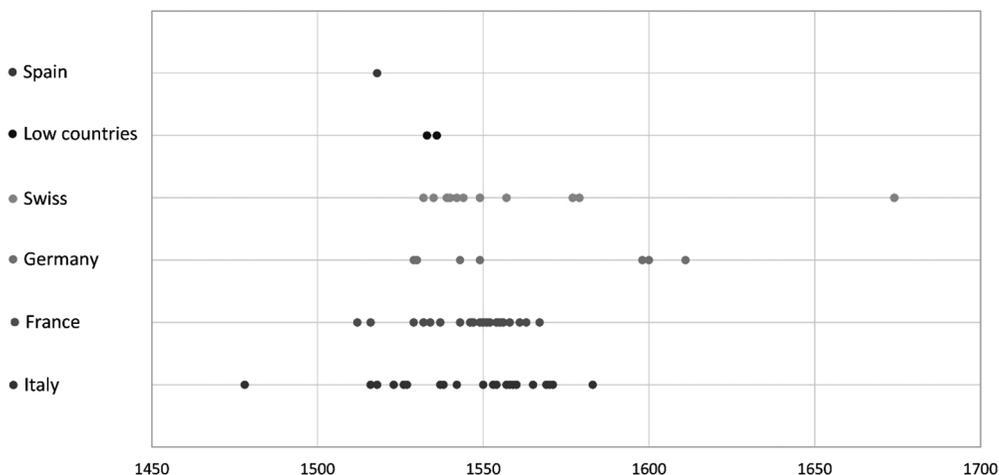


図2 ディオスコリデス『薬物誌』ラテン語訳・注解、出版地による出版状況。

は(1470年代のイタリアでの1点を除いて)1510年代から1570年代まで頻繁に72点が出版され(1年に1版),1580年代以降は散発的に1610年代まで6点(5年に1版)および1670年代に1点が出版されている。イタリア語訳は1540年代から刊行され,1550年代まで頻繁に11点が出版され(2年に1版),1560年代以降はやや数が減って1600年代までに8点(6年に1版),それ以後に2点(1620年代,1640年代)が刊行されている。フランス語訳は1550年代から1580年までの40年間に8点が出版され(5年に1版),1600年代の80年間に7点(11年に1版)が出版されている。スペイン語訳は1550年代から1570年までに5点が出版され(4年に1版),1630年代から1690年代に4版(15年に1版)が出版されている。ドイツ語訳の出版は1540年代に1点,1610年代に2点である。チェコ語の1点は1560年代に刊行されている(図3)。

18世紀までの期間で『薬物誌』がラテン語と近代語で出版された点数は,イタリア46,フランス43が傑出して多い。それに次いでドイツ18,スイス12,スペイン10が並んでいる。ネーデルランド2,チェコ1がわずかにあり,イギリス0では出版されていない。

ラテン語での出版数と近代語での出版数を比較すると,国によって大きな偏りがあることが分かる。18世紀までの『薬物誌』のラテン語と近代語

による訳書と注解書は131点であった。このうちイタリアとフランスの2カ国でそれぞれ35%ほどが出版され,それに続いてドイツとスイスでそれぞれ10%ほど,スペインで7%ほどが出版されている。これに対してラテン語訳81点だけを見ると,フランス(40%),スイス(15%),ドイツ(13%)ではその比率が高く,近代語訳よりもラテン語訳がより多く出版される傾向がある。とくにスイスでは近代語訳が1点も出版されていない。近代語訳51点だけを見ると,イタリア(45%)とスペイン(18%)ではその比率が高く,ラテン語訳よりも近代語訳がより多く出版される傾向がある(表1)。

5b) 図版

植物の挿絵の有用性を巡っては,古代より議論があり,大プリニウスは『博物誌』の中で否定的な見解を示している²⁴⁾。また,『薬物誌』の諸写本には,ウィーン写本のように植物の挿絵が描かれているものもあるが,ディオスコリデスの元の著作に挿絵が施されていたのかは不明である。コルナリウスとフックスというルネサンスを代表する二人の学者は,植物図版の有効性について相反する態度を示しており,これは文献学的な側面と実用的側面のいずれを重視するかという議論を象徴している²⁵⁾。

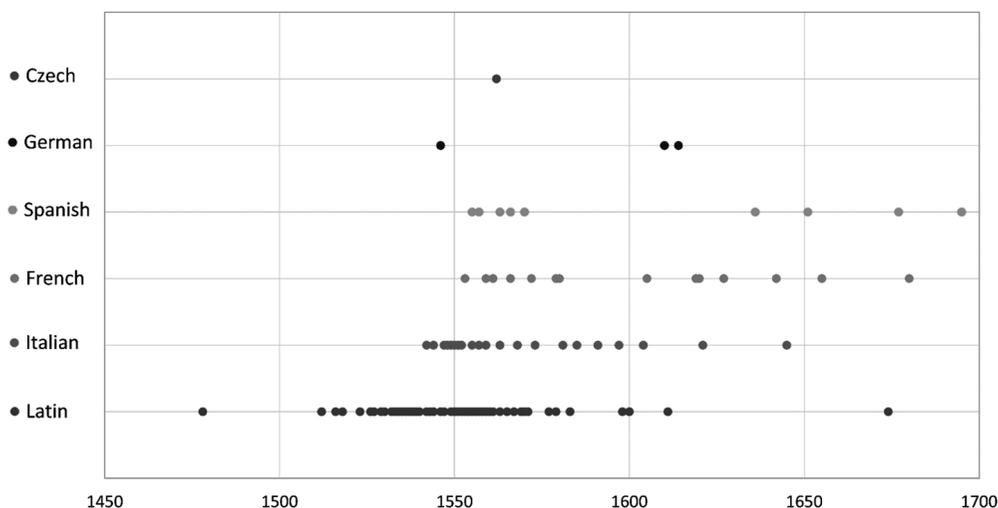


図3 デイオスコリデス『薬物誌』近代語訳,言語による出版状況。

表1 『薬物誌』 ラテン語版の出版地と近代語版の言語, 18世紀以前

	Italy	France	Spain	Germany	Swiss	Low countries	Czech	England	total
Latin	23	28	1	15	12	2	0	0	81
Modern	23	15	9	3	0	0	1	0	51
Total	46	43	10	18	12	2	1	0	132

	Italy	France	Spain	Germany	Swiss	Low countries	Czech	England	total
Latin	28.4%	34.6%	1.2%	18.5%	14.8%	2.5%	0.0%	0.0%	100%
Modern	45.1%	29.4%	17.6%	5.9%	0.0%	0.0%	2.0%	0.0%	100%
Total	34.8%	32.6%	7.6%	13.6%	9.1%	1.5%	0.8%	0.0%	100%

18世紀までに刊行された『薬物誌』のうち、図版のある刊本とない刊本があるが、ラテン語版と近代語版ではその比率が違っている。ラテン語訳・注解書81点のうち、図版のないものが56点、図版のあるものが25点で、図版のないものが多かった(69%)。近代語訳51点のうち、図版のないものは8点、図版のあるものが43点で、図版のあるものが多かった(84%)。

図版のない刊本とある刊本の刊行年次を、ラテン語版と近代語版それぞれで分析した。図版なしの刊本のラテン語版は(1478年版を除いて)、1512年から次々と1550年代までに49点が刊行され、それ以後は1610年代までに5点が刊行された。近代語版は1542年を皮切りに1552年までの11年間に7点、それ以後は1590年代に1点が出ている。図版なしの『薬物誌』の出版はラテン語版

と近代語版ともに1550年代までにピークを迎え、それ以後の出版点数は大幅に減少していた。

これに対して図版ありの刊本のラテン語版は1543年を皮切りに1571年までの30年間ほどの間に21点が刊行され、それ以後は16世紀に3点、17世紀後半に1点が刊行されている。図版ありの近代語版は1546年から次々と出版され1585年までの40年間に24点を数える。それ以後も頻度は下がるものの継続的に出版され、1695年までの100年間に17点、18世紀に入っても2点が刊行されている(図4)。

『薬物誌』の出版は、まず図版なしのラテン語版で1510年代から始まり、図版なしの近代語版が1540年代から加わった。図版ありのラテン語版と近代語版の出版は1540年代から始まると、図版なしの刊本は1550年代から激減した。すなわち『薬

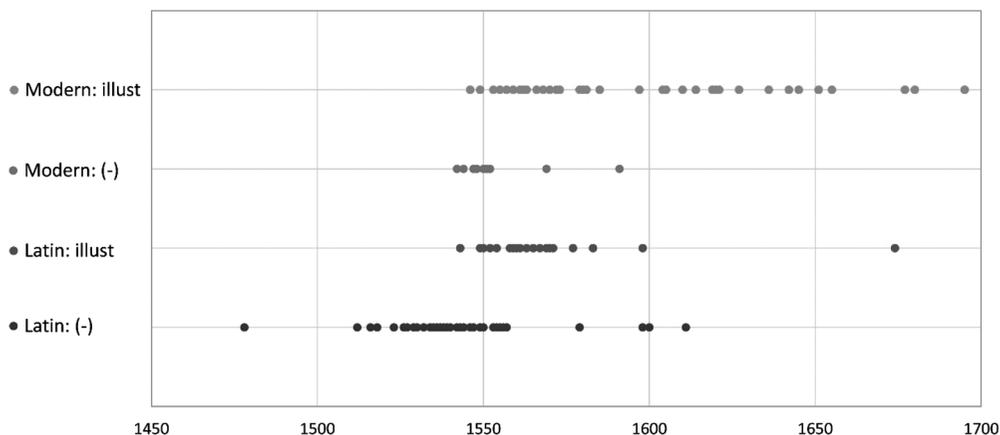


図4 ディオスコリデス『薬物誌』ラテン語版と近代語版, イラストの有無による出版状況。

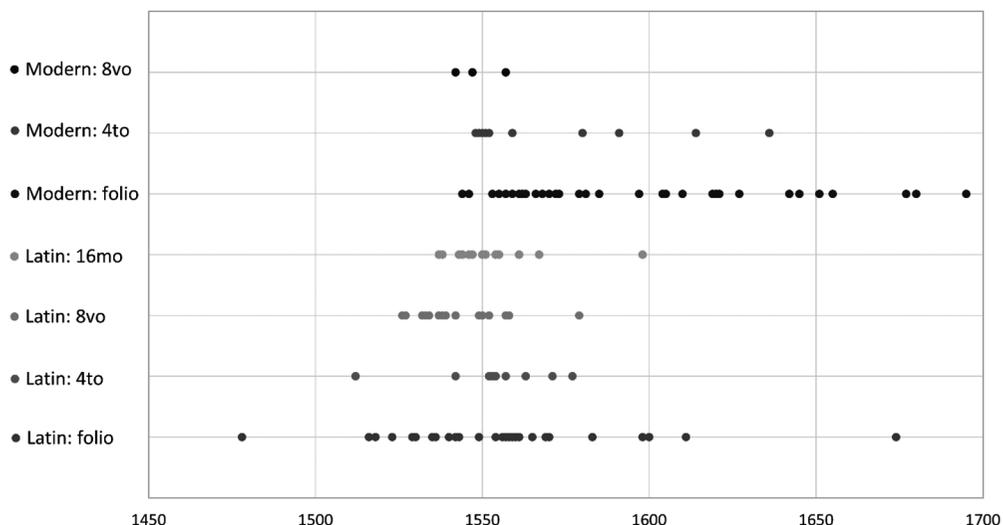


図5 ディオスコリデス『薬物誌』ラテン語版と近代語版，本のサイズによる出版状況。

物誌』の図版なしの版から図版ありの版への移行は1540～50年代にかけて起こり，これ以後は図版ありの『薬物誌』が主流となった。

5c) 判型

18世紀までに刊行された『薬物誌』の書籍サイズはさまざまで，本の高さを基準にして大きい方からフォリオ (folio, 約30cm)，4折 (4to, 約24cm)，8折 (8vo, 約16cm)，16折 (16mo, 約12cm) に区分される。ラテン語版81点のうち，フォリオ33，4折9，8折20，16折19であった。近代語版51点のうち，フォリオ38，4折10，8折3であった。

書籍サイズの年次推移を調べると，ラテン語版では大型の刊本 (フォリオ，4折) は1510年代から70年代に頻繁に出版され，小型の刊本 (8折，16折) は1520年代から1550年代の範囲に頻繁に出版されている。近代語版では大型の刊本 (フォリオ，4折) は1540年代から1650年代まで継続的

に出版され，小型の刊本 (8折) は1540～50年代の3点のみであった (図5)。

書籍のサイズは図版の有無と密接な関係がある。一般的に大型の刊本 (フォリオ，4折) では図版を掲載しやすいが，小型の刊本では図版の収録に難しさがある。この傾向はとくに近代語版で顕著であり，大型の48点のうち図版のあるものが42点 (87.5%) あり，小型の3点では1点に図版がある。ラテン語訳でも同様の傾向があり，大型の42点のうち図版のあるものが18点 (42.9%) あるが，小型では39点中の7点 (17.9%) が図版ありである (表2)。

6) 『薬物誌』刊本の二つの役割

『薬物誌』の最初の刊本は，無名者によるラテン語訳 (Colle di Val d'Elsa, 1478 [B-1]; Paris, 1512 [B-2]) で，アルファベット順に配列され，アパノのピエトロの序と注解が付いている。13世紀から

表2 『薬物誌』ラテン語版と近代語版，18世紀以前の書籍サイズと図版の有無

	Latin			Modern		
	total	folio+4to	8vo+16mo	total	folio+4to	8vo+16mo
total	81	42	39	51	48	3
(-)	56	24	32	8	6	2
illust	25	18	7	43	42	1

手稿本として流布・利用されていたものが印刷・出版された。

その後の出版状況をみると、『薬物誌』刊本には、2つの異なる目的があったと考えられる。第1は、人文学的な見地からギリシア語原典の記述そのものを研究対象とする、学術書としての『薬物誌』刊本である。第2は、実際の医療に役立てる実用書としての『薬物誌』刊本である。

ギリシア語原典のアルドゥス版 (Venice, 1499 [A-1]) が刊行されると、原典5巻本の配列によるラテン語訳が刊行されるようになった。バルパロ訳 (Venice, 1516 [B-3]), リュエル訳 (Paris, 1516 [B-4]), アドリアーニ訳 (Firenze, 1518 [B-5]) が登場し版を重ねた。またラテン語訳に付属する注解あるいは独立した注解書が多数書かれている。これらは大学におけるラテン語での医学学習・研究を目的とした、学術書としての性格をもつ『薬物誌』刊本であったと考えられる。これら『薬物誌』の初期のラテン語翻訳は、文献学的な性格が強く、ディオスコリデスのギリシア語原文を正確に解釈することに力点が置かれている。

これに対して近代語訳の『薬物誌』は、大学内外での学習や臨床での利用を目的とした実用的な性格を持つと考えられる。18世紀までイタリア語訳が23版と最も多く、ファウスト訳 (Venice, 1542 [D-1]), マッティオーリ訳 (Venice, 1544 [D-2]), モンティジャーノ訳 (Firenze, 1547 [D-3]) がある。フランス語訳は15版あり、デュ・ピネ訳 (Lyon, 1561 [E-3]), デ・ムーラン訳 (Lyon, 1572 [E-6]), マテー訳 (Lyon, 1553 [E-1]) がある。スペイン語訳は8版あり、ラグーナ訳 (Antwerp, 1555 [F-1]) とハラヴァ訳 (Antwerp, 1557 [F-2]) がある。他にドイツ語訳3版とチェコ語1版もある。

さらに薬草を描いた図版は薬草書としての実用的価値を高める。イタリア語訳では図版入りの『薬物誌』は1549年 (D-5) に登場し、1555年以降はほぼすべて (1591年版を除く)、合計23版中の15版が図版入りである。フランス語訳では15版すべて、スペイン語訳では9版すべて、さらにドイツ語訳の3版およびチェコ語訳1版も図版入りである。1550年代から近代語訳はほぼすべてが図

入りになっており、それぞれの国で実用書として用いられていた。

ラテン語訳・注解書でも図版入りのものが1543年 (B-19) 以降に出版され、81点中の25点が図版入りである。これらはラテン語による学習者、すなわち大学でラテン語による医学教育を受ける学生たちにとっても、『薬物誌』刊本が学識を得るための古典の医学文書に留まらず、実用的な利用価値のある教科書になったことを示唆している。

本研究は、JSPS 科研費 19K00276 の助成を受けたものです。

注

- 1) ギリシア語原典校訂版は Dioscorides; Wellmann (1906-14), スペイン語訳は Dioscorides; García Valdés (1998), ドイツ語訳は Dioscorides; Aufmessner (2002), 英語訳は Dioscorides; Beck (2020), 日本語訳は Dioscorides; 岸本 (2022).
- 2) Riddle (1985).
- 3) 古代の植物学については Hardy; Totelin (2016), 中世から近代以前の植物学については Arber (1938) [和訳: アーバー, 月川 (1990)].
- 4) Riddle (1985), p. 25-26.
- 5) Riddle (1985), p. xix.
- 6) Riddle (1960).
- 7) Sakai and Fukushima (2023).
- 8) Pritzel (1872) p. 84-87.
- 9) Dioscorides (2000) p. il-lxvii. リドルによるディオスコリデス書誌 (Riddle, 1960) を参照して目録を検証すると、リュエル訳に限っても掲載されていない版があったり (Basel, 1539), 実在しない版が掲載されたり (Basel, 1932; Frankfurt, 1545), 同じ版が重複して掲載されたり (Strasbourg, 1529; Basel, 1542; Lyon, 1543; Lyon, 1550; Lyon, 1552) といった問題点が見いだされる。
- 10) Riddle (1960).
- 11) リドルによる複合書第14は Marpurgi, 1583 (未確認) とされているが、今回の研究で見いだされたのは Marpurgi, 1543 である。
- 12) Dioscorides; Wellmann (1906-14), vol. 2 p. xiii-xiv; Dioscorides, García Valdés (1998) I, p. 39.
- 13) Cronier (2006).
- 14) 「 $\tau\theta$ βάλσαμον (19 バラサモン)」から始まり (fol. 1r), 「 $\acute{\omega}\chi\rho\alpha$ $\psi\nu\zeta$ 」(黄土 757)」で終わる (fol. 19v)
- 15) Cronier (2013).
- 16) シュプレングルは Constantinopolitanus として言及する。
- 17) Touwaide (1991).
- 18) Cronier (2007).
- 19) リュエルの伝記については, Jovet, Mallet (2022) お

- よび Riddle (1960) p.34 を参照.
- 20) Riddle (1960) p.32.
- 21) この他、リドルはグビルによる項目の配置換え、例えば *βούνιον/Bunion* ブニオンと呼ばれるセリ科の植物の項目が第2巻から第4巻に移されたことを指摘するが、これはすでに1537年のコロンによる改訂で修正されている。Riddle (1960) p.32.
- 22) マッティオーリの伝記については、Bynum, Bynum (2007) p.853 および Riddle (1960) p.96–97 を参照.
- 23) ラグーナの伝記については、Bynum, Bynum (2007) p.761–762 および Riddle (1960) p.108 を参照.
- 24) 大プリニウス『博物誌』第25巻4章参照.
- 25) 両者の論争は『皮を剥がされた小さな雌狐 *Vulpecula excoriata*』(1545) というコルナリウスの著作に端を発する。この書の中で、コルナリウスは自身が発表した書物『医学一般あるいは要約論考 *Universae rei medicae [epigraphae] seu enumeratio compendio tractata*』(1529) を、フックスが『医術に関する要綱および摘要あるいは入門 *Compendiaria ac succincta admodum in medendi artem [eisagoge] seu introduction*』(1531) で剽窃したとして徹底的に批判している。批判の大半はヒポクラテス・ガレノス文書に関するものであるが、ディオスコリデスの『薬物誌』に関しても言及があり、フックスはアドリアーニと共に批判されている。さらに、コルナリウスは1557年に出版した『薬物誌』注解で、図版は植物の時間的な変化・生息地の特性・季節を示すことができず、植物の同定には役に立たないとして省略し、ディオスコリデスのギリシア語を正しく理解することこそが重要であるという立場を明確にしている。これに対して、フックスは『草木誌著明注解』(1542)の中で、図版は記述よりも記憶に残りやすく、植物を識別しやすくすると論じ、挿絵の重要性を説く。さらに、コルナリウスと異なり、ディオスコリデスが記述していない植物の性質についても進んで補完した。コルナリウスとフックスの論争の概略については Kusakawa (2012) p.126–127 参照.
- Cronier M. Recherches sur l'histoire du texte du *De materia medica* de Dioscoride. Thèse de doctorat en Philologie grecque, Paris, EPHE; 2007.
- Cronier M. Comment Dioscoride est-il arrivé en Occident? A propos d'un manuscrit byzantin, de Constantinople à Fontainebleau, *Néa Póμη* 10, 2013, p.185–209.
- Dioscorides, Aufmesser M. Fünf Bücher über die Heilkunde. Hildesheim : G. Olms; 2002.
- Dioscorides, Beck LY. *De materia medica*. 4th ed. Hildesheim : Olms-Weidmann, 2020.
- Dioscorides, García Valdés, M. *Plantas y remedios medicinales : de materia medica*. Madrid: Gredos; 1998.
- Dioscorides, Osbaldeston TA, Wood, RPA. *Dioscorides de materia medica : being an herbal with many other medicinal materials / written in Greek in the first century of the common era, a new indexed version in Modern English*. Johannesburg: IBIDIS; 2000.
- Dioscorides, Wellmann M. *De materia medica libri quinque*. Berolini, Weidmann; 1906–14.
- Dioscorides, 岸本良彦. *ディオスコリデス薬物誌*. 八坂書房; 2022.
- Gerabek WE. *Enzyklopädie Medizingeschichte*. Berlin: Walter de Gruyter; 2007.
- Hardy G, Totelin L. *Ancient botany*. Oxon: Routledge; 2016.
- Jovet P, Mallet JC. Ruel, Jean also known as Ruellius. In: *Complete Dictionary of Scientific Biography*. Encyclopedia.com. 10 Jun. 2022. <<https://www.encyclopedia.com/science/dictionaries-thesauruses-pictures-and-press-releases/ruel-jean-also-known-ruellius>>
- Kusakawa S. *Picturing the Book of Nature: Image, Text, and Argument in Sixteenth-Century Human Anatomy and Medical Botany*. Chicago: University of Chicago Press; 2012.
- Pritzel GA. *Thesaurus literaturae botanicae omnium gentium, inde a rerum botanicarum initiis ad nostra usque tempora, quindecim millia operum recensens*. Lipsiae, F. A. Brockhaus; 1872.
- Riddle JM. Dioscorides. In: Kristeller PO. *Catalogus translationum et commentariorum: mediaeval and Renaissance Latin translations and commentaries: annotated lists and guides*. Vol. 4. Washington: Catholic University of America Press; 1960, pp. 1–143.
- Riddle JM. *Dioscorides on pharmacy and medicine*. Austin, TX: University of Texas Press, 1985.
- Sakai T, Fukushima M. A Bibliographic Catalogue of Published Editions of Dioscorides' "De materia medica." *J Jap Soc Hist Med*. 2023, pp. 90–108.
- Touwaide A. Un manuscrit athonite du *ΠΕΡΙ ΥΛΗΣ ΙΑΤΡΙΚΗΣ* de Dioscoride: l' *Athous Megistis Lavras* Ω 75. *Scriptorium* 45-1; 1991, pp. 122–127.

参考文献

- Arber AR. *Herbals, their origin and evolution, a chapter in the history of botany, 1470–1670*. Second ed. Cambridge: University Press; 1938.
- Arber AR, 月川和雄. *近代植物学の起源*. 八坂書房, 1990.
- Bynum WF, Bynum H. *Dictionary of medical biography*. Westport, CT: Greenwood Press; 2007.
- Cronier M. Quelques aspects de l'histoire du texte du *De materia medica* de Dioscoride, dans A. Roselli (éd.), *Ecdotica e ricezione dei testi medici greci*. Atti del V Convegno Internazionale, Napoli 1–2 ottobre 2004 (Collocanea 24), Napoli; 2006, p. 43–65.

Inheritance and Compilation of Dioscorides’ “De materia medica” in the History of Medicine: A Bibliographic Study of the Printed Books

Tatsuo SAKAI¹⁾ and Masayuki FUKUSHIMA²⁾

¹⁾ Faculty of Health Science, Juntendo University, Tokyo

²⁾ University of Edinburgh, Edinburgh

An evidence-based publication catalogue of Dioscorides’ “De materia medica” was prepared on the basis of online catalogues of prominent libraries and digital books available online in the world. The catalogue was verified to be consistent with Riddle’s catalog on Dioscorides. The Greek original text was published in eight critical editions in nine publications. The Latin translation was produced by seven translators in 52 publications, among which 41 publications were annotated with commentaries. In addition, 30 Latin commentaries were published separately. The total 71 commentaries were written by 24 authors, including two anonymous writers. Ruel’s translation has been most popular and has been published at least 36 times. Italian translations were published 23 times until the 18th century and once in the 21st century, among which 21 publications were translated by Mattioli. French editions were translated by three authors and published 15 times until the 17th century. Spanish editions were published 11 times and translated by Laguna and three other authors. German translations were published three times until the 17th century and twice after the 20th century. A Czech translation was published once in the 16th century. English translations were published in six editions after the 20th century. Japanese translations were published two times after the 20th century. The published books of “De materia medica” were suggested to be used for two separate purposes, either for humanistic study of the ancient text with Latin editions or for practical use in the pharmacy with modern translations with woodcut illustrations.

Key words: Dioscorides, “De materia medica”, Latin translations, Modern language translations, Publication